

新

歌人群像

# 島木赤彦

● 努力と精進の人

● 沖ななも ●



長野県・諏訪湖のほとりに「赤彦記念館」がある。シャープな建物で、島木赤彦のイメージとは少し違う。住まいはそこから少し山に向かったところにある。これといつて変哲もない家だが、懐かしいような温かみがある。諏訪には三度行ったが、三度とも風が強かった。凍るような季節には行ったことがないが、温度差のある盆地の気候で、かなり寒さが厳しい。

## 川井静子との出会いと別れ

島木赤彦（本名塚原俊彦）は、一八七六（明治九）年、長野県上諏訪村（現・諏訪市）で生まれる。父浅茅は教育者として絶大な信頼を得ていた。諏訪地方では「大先生」と呼ばれるほどの人格者であった。したがって、赤彦もかなり厳しく躰けられた。

母さいは早世し、継母のみをに育てられた。継母は薄給の夫を支え、しっかり者だったという。赤彦は子どものころ、かなりのゴタ、つまり腕白だったらしい。継母も手を焼いたらしいが、赤彦は終生慕っていたようだ。

長兄は赤彦とともに短歌を作っていた。次兄は豪放な人だった。三兄は神経質で、本棚から持ち出した本を、元のとおりに戻してお



赤彦の家族。右から3人目が赤彦、1人おいて座っているのが妻・ふじの（1920年）

いてもすぐにはばれてしまつて叱しかられた。塚原家には剛と繊細が同居していたらしい。

実母が早く亡くなり、弟の文夫と豊穂も夭折。三兄武彦、次兄秀彦、長兄泰蔵とつぎつぎ亡くなり、最初の妻と長女も病死する。さらには長男に先立たれるということで、赤彦の作品にはどこことなく寂寥感せきりょうがあるのも、こんなところからきているのかもしれない。

赤彦は二十二歳のとき久保田家に養子に入り、うたと結婚した。しかしうたは産褥熱さんじよくで亡くなってしまふ。「亡きがらを一夜抱ひたきて寝ねしこともなほ飽きたらず永久とほに思はむ」と後に詠んだほど、強い思いを持つていた。優

れた女性だったらしい。しかし家の事情で、間もなくうたの妹ふじのと結婚する。うたが亡くなって七日目に早くも再婚の話がでたという。当時の家制度のなかで因習に縛られていたのである。

赤彦は教師として児童たちの教育にあたった。一九二二（大正十一年）以降、三冊の『赤彦童謡集』を出版している。赤彦の教育理念は個性の尊重、あるいは平等といったもので、「子どもに学ぶ」という姿勢を持っていた。「子供は大人の子供であらで大人ぞ子供の子供なるべし」という歌も残している。なかなかユニークな先生でもあつたらしく、児童の自主性を重んじていた。「児童経歴簿」というものを作っている。児童一人一人の性格や性情などを記したもので、こまかい観察が行き届いている。

学校を幾つか歴任したが、広丘村尋常小学校の校長として赴任したとき、訓導として着任してきた川井（中原）静子に出会うことになる。静子の回顧によると、下宿先が同じ家の別宅ということで、夕食のあとなど、万葉集の講義や歌の指導を受けた。「時たま、先生が私をじつと見つめる目の深さを感じた。万葉集の講義中にも、ふと止めて考え込んでしまった。私はどうしたことかと上向いて見

れば、先生は私を見つめておいでになるではないか」と書いている。静子も、「先生を限りなく尊敬し、お慕い申し上げ、親としたしんで甘えては、その幸福に陶醉していたのだ」と吐露つとろしている。体の弱かった静子をずいぶん庇かばっていた。赤彦三十四歳、静子十八歳だった。

後に「アララギ」編集のため、また文学に専念するために上京することになるのだが、静子との苦しい関係から逃れるのも一つの理由であつたようだ。赤彦自身が「東京へ出るといふより信濃を去るといふほうが急務になつている」と述べている。

## 悲痛な体験を踏まえて

赤彦は十八歳ごろから新体詩を発表している。二十歳ごろには多くの雑誌に投稿していた。正岡子規に「藍毘尼らんびにの林の中に光満ちてあもりたまひし釈迦牟尼しやくかむにほとけ」の一首を採られた。これを機会に子規に傾倒してゆく。

子規の短歌革新運動に刺激されて、一九〇三（明治三十六）年、諏訪で太田水穂みずほ、森山汀川ていけんらと「比牟呂ひむろ」を創刊する。前年に子規は亡くなったが、ちょうど同じ年、根岸短歌会の機関誌「馬酔木あしび」も創刊され、編集者の

# 島木赤彦

伊藤左千夫とも親交を深めていくことになる。「比牟呂」を送って左千夫に絶賛されるなど、赤彦自身にとっても飛躍の時期であった。その年の末には「馬酔木」にも短歌を発表している。「比牟呂」へは、かなりの熱の入れようだった。文学への情熱やみがたく、ついに文学に専念するため教員をやめて養鶏業を営むことにした。

「馬酔木」はまもなく「アカネ」に名称を変え、後、廃刊。蔵真が「阿羅々木」を創刊、左千夫も加わったことで、赤彦もそれにならった。のち誌名を「アララギ」として左千夫の編集発行に移る。そこで「比牟呂」を「アララギ」と併合するようになった。一九〇九（明治四十二）年のことである。

一九一三（大正二）年、左千夫の死後、中村憲吉との合同歌集『馬鈴薯の花』を出版した。これが「アララギ」叢書第一篇である。このときから「島木赤彦」のペンネームを用いるようになる。この年、茂吉の『赤光』が脚光をあげ、白秋の『桐の花』が出るなど、勢いのある年だった。

夏草のいよよ深きにつつましき心かな  
しつきはまりにけり  
いささかの心動きに冬がれの林の村を  
去らんと思ひし

万葉調の格調高い詠風である。

二冊目の歌集は一九一五（大正四）年の『切火』。単独の歌集は初めてである。

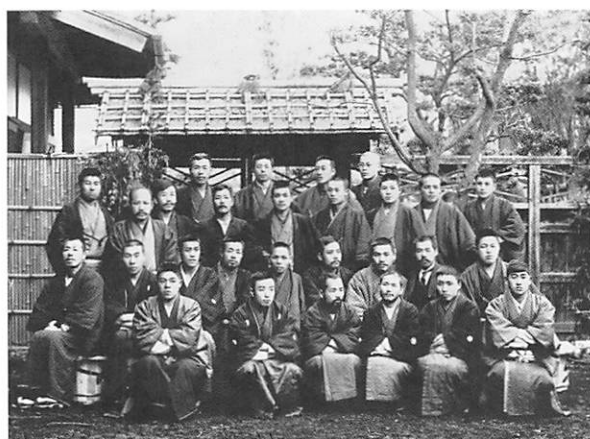
人に告ぐる悲しみならず秋草に息を白  
じろと吐きにけるかも  
静もれる車上の姿、みづからの病を知  
れる吾子が静もり

これにさきがけ一九一四（大正三）年、いよいよ上京し、茂吉らと「アララギ」の編集発行をすることになる。そのあと編集を担当した古泉千樫の編集が滞っており、結局は赤彦がすべてを引き受けることになる。

一九二〇（大正九）年、第三歌集は『氷魚』。ここには長男政彦の死が最大のテーマになっている。

たまさかに帰れる父のかたはらを寂し  
と思ふか子どもは眠る  
むらぎもの心しづまりて聞くものかわ  
れの子どもの息終るおとを  
幼きより生みの母親を知らずしていゆ  
くこの子の顔ながめつつ  
政彦の足音ききて鳴きしとふ山羊も売  
られてこの家になし

長男政彦は病弱なうえに二歳で母を失って



第二回信濃俳人大会（1905年）の記念撮影。  
前から2列目の右から3人目が赤彦

おり、とくに気がかりであった。一九一三（大正二）年に眼病のため一時失明の危機にあった。一九一七（大正六）年にはとうとう十八歳で亡くなってしまふのである。赤彦のショックは大きかった。切実な作品を読めばその深さは測り知られるというものだ。悲痛な歌がなんとも言えぬ寂しさを湛えている。

## 走りつづけた写生の道

第四歌集は一九二四（大正十三）年の『太虚集』。

赤彦の「みづうみの氷は解けて～」の歌碑（長野・富士見町）の拓本。斎藤茂吉の万葉体による書

水海之氷者等計而  
尚寒志三日月乃景  
波爾映呂布  
赤彦詠 茂吉書

同年には『歌道小見』も出版され、赤彦の短歌への姿勢があらかになる年でもあり、もつとも充実した年といつてもいいだろう。

冬の日の暮るるに早し学校より一人びとりに帰り来る子ども

三日月の光幽けき木がくりの庵にかへりて心やすらふ

湖のへに朝ありける薄氷風ふきいでて砕けるかな

みづうみの氷は解けてなほ寒し三日月の影波にうつろふ

高槻のこずゑにありて頬白のさへづる春となりけるかも

茂吉は、「実質的に『幽玄』をも成就してゐる。『幽玄』が（略）写実主義者によって成就せられたのはおもしろい」と言っている。

第五歌集は没後に出版された『柘蔭集』。茂吉は、「へ太虚集」の歌風の神韻縹渺が稍詰まつて素朴に還つたやうにおもへる」と言う。

朝な朝な湖べにむすぶ薄氷昼間はとけて日和つづくも

沸かしたる山の朝湯に蜘蛛も蟻も命終りて浮びぬにけり

隣室の書よむ子らの声きけば心に沁みて生きたかりけり

魂はいづれの空に行くならん我に用なきことを思ひ居り

静謐、寂莫、透明などという言葉であらわせばいいだろうか、冬の諏訪湖のように。

前にも述べた『歌道小見』は、赤彦の歌論としてあまりにも有名であるし、一貫した姿勢を貫いているのが見事といえる。のちのち子息の語るところによると、子供に向かって「眼を大きく開けて物をしっかり見ろ、本気でやれ、感動を大きく持て」と教えていたという。この姿勢は歌においても一貫している。何か所か抄出してみたい。

「全集中から生れない歌は、生れないさきから歌ではありません」

万葉集時代の人は「心が単純で、一途で、調子がだまかで、太くて強いところがあった

ようで……単純一途であるから、原始的な強さと太さを持つて……」

「物心相触れた状態の核心を歌い現すのが、最も的確に自己の主張を表現する道と思うのでありまして、これを写生道と称す……」

「歌う主観が全心的に集中されれば、されるほど単一化されて……」

「現代人が歌を作すからは、その歌の上に現代人のもつ思想が現れているべきである」

などなど挙げればきりがなく、赤彦の歌論が展開される。「歌道小見」は『万葉集の鑑賞及び其批評』と対をなすように、赤彦の歌に対する姿勢が述べられている。「歌道」であり、「鍛錬道」であり、「道」という精神論としての位置を占める。

赤彦は『万葉集』を基本において写生の道を走り続けた。ストイックなまでに努力・精進の人だったと思う。

このころ、反アララギの「日光」が創刊され、アララギを背負う赤彦にとっては苦しい時期であつたらう。

一九二六（大正十五）年三月、胃癌のため亡くなった。この年、時代が昭和へと変わったのである。

（おき・ななも「個性」編集長）